

(うーん……)

僕は学校の授業中に、最後尾の席に座って暇を持て余していた。

別に勉強は嫌いじゃない、むしろ好きな方である。

好奇心はある方なつもりだし、わからないことがわかるようになるのは、楽しいに決まっている。

だから、大抵の授業は、ちゃんと真剣に受けてるんだけど……。

(それにしたって、この先生の授業はちょっと、眠すぎるんだよなあ……)

定年間近の男の先生で、人柄は悪いわけじゃないんだが、とにかく授業が下手すぎる。

話す内容は退屈だし、そもそもずっと黒板の方を向いたままもごもごしゃべってるから、ろくに聞き取れやしない。

板書は字が小さくて色分けもしないから見にくい上に、ほとんど教科書の丸写しで、がんばって書きとろうという気にもなれなかった。

実際、僕以外の生徒も大半が、毎回眠そうにしている。

(もういいや。今日からこの先生の授業の時は、遊んで気分転換することにしよう！)

僕はそう決めると、精神を集中させて『存在の根源の世界』に入り、すぐ隣の席でぼーっとしている女子生徒の田莊風夏さんの存在を、少しばかり書き換えてやった。



«田莊風夏は、授業中に獅童蓮斗からメモを渡されて頼まれた内容には、なんでも喜んで従う»

«田莊風夏は、授業中に獅童蓮斗から渡されたメモは、読んだ後で他の誰にも見られないように、きちんと処分する»



(よし。試しにまずは、軽い遊びから……)

僕はノートの切れ端にさらさらっとメモを書いて、彼女の机にそっと乗せた。

彼女の目がそれを見る。

それには、こう書かれていた。

『授業が終わるまで、紙の交換でしりとりしようよ。しりとり』

彼女はそのメモを読むと、小さく首を傾げた後にちらりと僕の方を見て、こくんと頷いた。

それから、メモ書きを仕舞い込み、代わりに机から取り出したルーズリーフにさらさらと書いて、僕に渡してくる。

『リス』

その文字の横には、かわいらしいリスのイラストまで添えてある。

(へえ。風夏さんって、絵が得意だったんだな)

僕はちょっと感心した。

正直なところ、眼鏡をかけた地味な外見の子で、他の子ともあまり話さずに黙々と本を読んでばかりいるから、これまで彼女のことはほとんど知らなかったのだ。

僕もその横に、文字と一緒にがんばって下手なイラストを描いて、返却した。

『すずめ』

彼女がまた、続きを書く。

『めだか』

『カラス』

『すいか』

『カブトムシ』

そんな感じで、二人で交互にやり続けたのだが、これがまあ、なかなか面白かった。

僕も久し振りにお絵描きというか、落書きをしてみた感じだったし。

たまには、女の子とエロくない遊びをするのもいいもんだ。

「ありがとう。楽しかったよ」

休み時間になると、僕は風夏にそうお礼を言った。

「……うん」

彼女も嬉しそうに微笑むと、こくりと首を縦に振った。

(思ったより、かわいい子だなあ……)

僕は、素直にそう感じた。

エロくない遊びもいいけど、こうなると、やっぱりちょっとエロい遊びもしてみたくなるよね。